法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-04

アラビア語文法学者たち

ABU-MANSOUR, Anas Hasan / EMURA, Hirofumi / 江村, 裕文 [訳] / アブー・マンスール, アナス・ハサン

(出版者 / Publisher)
法政大学国際文化学部
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
Bulletin of the Faculty of Intercultural Communication, Hosei University Ibunka / 異文化. 論文編
(巻 / Volume)
17
(開始ページ / Start Page)
25
(終了ページ / End Page)
51
(発行年 / Year)
2016-04-01

〔その他〕

アラビア語文法学者たち

Traditional Arab Grammarians

Anas Hasan Abu: Mansour
（アナス・ハサン・アブー・マンスール）
江村裕文編訳
EMURA Hirofumi

【Ⅰ】 アラビア語研究と ألدّؤل（アッドゥアリ）

【Ⅱ】 バスラ学派

【Ⅲ】 クーファ学派

【Ⅳ】 سيبويه（スィーバワイヒ）と ألكتاب（アル・キターブ『書』）

【Ⅰ】 アラビア語研究と ألدّؤل（アッドゥアリ）

アラビア語は西暦７世紀の初めになってやっと本格的に研究され始めた言語の一つだといっても過言ではない。アラブ人がいつ頃から自分たちの言語を研究することに興味を持ち始めたのか断定するのは困難である。歴史的には、伝統的なアラビア語文法学者たちはこの言語の音の体系にまず関心をいだいた。彼らが持っていた信念は、「正しい」言語というものは神からの啓示であるというものであったが、これは、言語というものは人間が恣意的に決めた習慣の産物であるというアリストテレス学派の学者たちの信念とは異なったものであった。彼らア

ラビア語文法学者たちは、聖なる書 ألقرآن『クルアーン』を人類に対する神の啓示の徴（アーヤ）であると考えていた。彼らの主な関心は、『クルアーン』の言語であるアラビア語を健全なままにまもり、それが俗化したり失われたりしないようにすることであった。事実、このような宗教的な興味がアラビア語の文法研究を発展させた主な原因だったのである。

西暦7世紀の初めにイスラーム社会を形成しているのはアラブ人だけという状態ではなくなっていた。インド人もいればペルシア人もエジプト人もいた。それらの外国人の影響であろうか、アラビア語の読み方・書き方・話し方に堕落の影が忍び寄り始めた。さまざまな地域の方言からの影響もアラビア語が損なわれていく原因となった。

لحن（ラハン）という言葉があるが、これはアラビア語を話す人が使う正しくない言い回しや間違いのことを表す。ラハンは識字能力の低い人のみならず、読み書きができる人にとっても日常的な問題となっていった。ラハンを犯してはならないということから、文法学者たちはアラビア語をまもろうと努力するようになった。彼らがこのことに成功したのは疑問の余地がない。西暦7世紀の終わりごろまでに、文法学者たちはこの目的を達成すべく互いに競いあい、そして、言語を科学的に研究する方法が開発されたわけである。

その競いあいの結果は、二つの、それぞれが独自の特徴を有している、アラビア語文法史において有名な文法学派が確立したことにはっきりと見られる。一つはバスラ学派、もう一つはクーファ学派として知られるようになった。双方ともイラクの都市の名前をとったもので、これらの都市において言語に対する興味が見える形になっていったのである。ラハンに対する戦いが重要だと最初に気づいた学者は、

أبو الأسود ألدّؤل（アブー・アル＝アスワド・アッドゥアリ）であろう。アッドゥアリに関しては多くの逸話が伝えられている。そのうちの一つ、よく学者が引き合いに出すのは、彼の娘に関するエピソードである。

ある日のこと、アッドゥアリが家に入って娘に会ったときのこと、娘は次のように言って父親に話しかけたのである。يا أبى, ما أجمل ألسّماء. Ya: 'abi:, ma: 'ajmal-u 'al sama:'i「ヤー、アビー。マー　アジュマル　アル＝サマーイ」つまり「お父さま、空で一番美しいものはなに？」。

これに対して、「星だ」とアッドゥアリは答えた。けれども娘は言った。「ううん、お父さま。私は空にあるもっとも美しいものについて言ったのではありません。どんなに空が美しいかについて言いたかったの。」

アッドゥアリは「それなら、お前、ما أجمل ألسّماء. .ma: 'ajmal-a 'al sama:'a「マー　アジュマラ　アル＝サマーア」って言わなきゃ。」

このような具合に娘がラハンを犯したことを契機に、アッドゥアリは、第４代ハリーファ（カリフ）علي ابن أبي طالب（アリー・イブン・アブー・ターリブ）から申しつかったアラビア語文法を規則づける仕事を始めた。

アッドゥアリは、伝統的なアラビア語文法学者や言語学者たちにおけるアラビア語文法の創始者、父として認められている。彼のとった

研究方法はいわば帰納的な方法で、観察を積み重ねることによって最終的に一般的な特徴を明らかにしようとするものであった。アッドゥアリが自分自身で示唆していることだが、彼がたてた規則というのは類推を積み重ねた結果であった。けれども、アッドゥアリと同時代の学者でその時点で彼を認めたものはほとんどいなかった。そのため、アラビア語文法の研究が始まったのはアッドゥアリの少なくとも 1 世紀後ということになった（Ami:n 1956）。彼らは عبد الله ابن إسحاق الحدرمي「アブダッラ・イブン・イスハーク・アル＝ハドラミー」をアラビア語文法の創始者として認めている（Ami:n 1956, Dayf 1968, Brockelmann 1960, Flisch 1966 等参照）。Ami:n（アミーン）はさらに、アラビア語文法の研究が始まったのは سيبويه（スィーバワイヒ）が ألكتاب『アル＝キターブ（書）』という有名な文法書を著わしたときだと主張している。アッドゥアリや彼の弟子たちの研究を支えていた動機は、خدمة القرآن Khidmat Al-Qur'a:n「『クルアーン』のために」という合言葉であった。アッドゥアリ一と彼の弟子たちはアラビア語文法の先駆者であったし、現在でもそうみなされている。彼らの業績はアラビア語の「擁護」にこそ最大の影響を及ぼしたからである。

【Ⅱ】 バスラ学派

イラクのバスラ学派がアラビア語の文法研究の誕生に関わった。バスラ学派の学者たちは言語学的思想を打ち立てた最初の指導者とみなされている。バスラ学派の学者たちは伝統的に以下の七つの世代に分類されている。

أبو الأسود ألدّؤل（アブー・アル＝アスワド・アッドゥアリ）

(1) يهيا العدواني,عبد الرحمان إبن حرمز, عنبسه المهر, نصر اللّيث

Yahya: Al-”Adwa:ni, ”Abdurahma:n Ibn Hirmiz, ”Anbasah Al-Mihri, Nasr Al-Leithi（ヤフヤー・アル＝アドワーニ、アブドルラフマーン・イブン・ヒルミズ、アンバサハ・アル＝ミフリ、ナスル・アル＝レイシ）

(2) أبو عمر, إبن أبى إسحاق

Abu: ”Umr, Ibn Abi: Isha:q（アブー・ウムル、イブン・アブー・イスハーク）

(3) يونس, الخليل, الأخفش

Yu:nis, Al-Khali:l, Al-Akhfash（ユーニス、アル＝ハリール、アル＝アフファシュ）

(4) أبو زيد, اليزيدي, سيبويه

Abu: Zayd, Al-Yazi:di, Si:bawayh（アブー・ザイド、アル＝ヤズィーディ、スィーバワイヒ）

(5) قترب, الأخفش

Qutrub, Al-Akhfash（クトゥルブ、アル＝アフファシュ）

(6) الرياش, المازن, الجرم

Al-Riya:shi, Al-Ma:zini, Al-Jurmi（アル＝リヤーシ、アル＝マーズィニ、アル＝ジュルミ）

(7) المبرّد

Al-Mubarrad（アル＝ムバッラド）

バスラ学派の学者たちは、彼らのとった類推の方法によって知られており、القياسيين Al-Qiya:siyyin「キヤースの人々（類推学者たち）」というあだ名が広がっているほどである。القياس Al-Qiya:s（類推）は、バスラとクーファのライバル学派を識別する主要な境界線となった（Ami:n 1956）。バスラ学派の学者たちはもっとも一般的な類推のパターンにもとづく派生形のみを認め、日常のことばや詩によく見られるような「不規則」な派生形を用いることを批判した。バスラ学派の学者たちの主要な資料は القرآن『クルアーン』であった。彼らは都市住民のことばに重きをおかず、砂漠の民であるベドウィンのことばを「正しい」アラビア語の宝庫と考えた。バスラ学派の学者たちは注意深く材料とする言語資料の選択に当たり、クーファ学派の学者たちが用いる資料を「堕落した」資料だとして非難した。最終的にバスラ学派は独自の文法を書き上げ、それを万民の文法としてしまった。バスラ学派の影響は、その時代の文法学者たちに「文法は類推である」との信念を支配的に行きわたらせたという点に見ることができる。バスラ学派から新しい別の流れをつくり出したのは、西暦 8 世紀の終わりころの الخليل إبن أحمد Al-Khali:l Ibn Ahmad（アル＝ハリール・イブン・アフマド）であった。彼は韻律に見られるアラビア語の体系を明らかにし、アラビア語言語学の歴史における文献学の最初の学派の基礎を確立した。また彼は كتاب العين Kita:b Al-”ayn『アインの書』

と呼ばれる、アラビア語の最初の辞書の編纂を始めたが、この辞書は彼の存命中には完成しなかった。

バスラ学派のもっとも大きな業績は、793 年に死去した سيبويه Si:bawayh（スィーバワイヒ）の手によるもので、彼はアラビア語文法研究の伝統においてもっともはやく、独創的で完璧な記念碑を書き残した。スィーバワイヒの文法は الكتاب Al-kita:b『アル＝キターブ（書）』という名前がつけられている。『アル＝キターブ（書）』は、実際上アラビア語の文法の伝統がすべてこの上に打ち立てられる土台と見なされている。『アル＝キターブ（書）』に関してはあとで触れる。

【Ⅲ】 クーファ学派

クーファ学派の創設者は ابو جأفر الرآس Abu: Ja'far Al-Ru'a:si（アブー・ジャアファル・アル＝ルアーシ）である。彼は الفيصل في النّحو Al-Faisal fi: Al-NaHw『文法における公準』というタイトルの文法書を著した。クーファ学派の学者たちは伝統的に次の五つの世代に分類されている。

ابو عمر Abu: "Umr（アブー・ウマル）

(1) الحرّاء, الرآس

Al-Harra:', Al-Ru'a:si（アル＝ハッラーウ、アル＝ルアーシ）

(2) الكسائي

Al-Kisa:'i:（アル＝キサーイー）

(3) اللّهياني, الفرّاء, الأحمر

Al-Lhya:ni, Al-Farra:’, Al-Ahmar（アル＝リフヤーニ、アル＝ファッラーウ、アル＝アフマル）

(4) ابن السّكيت, التّوّال, ابن سعدن

Ibn Al-Siki:t, Al-Tawwa:l, Ibn Sa”dan（イブン・アル＝スィキート、アル＝タウワール、イブン・サウダン）

(5) ثعلب

Tha”lab（サウラブ）

クーファ学派の学者たちは、「不規則」という概念に強い関心を抱いていた。そこでクーファ学派は「不規則学派」として知られるようになった。クーファ学派の学者たちはバスラ学派に比べるといくぶんか寛大で、必ずしも一般的ではないような用法も許容した。彼らは الفصحى, Al-FuSha:（フスハー）「正則語」にもいろいろ異なった方言が存在しているのだということを初めて認めたが、それは9世紀のことであった。またクーファ学派の学者たちは何でも分析の対象と考え、アラビア語に見られる現象のすべてを記述しようとした。この点が二つのライバル学派のもう一つの相違点である。というのは、バスラ学派の学者たちが分析の対象としたのは、もっとも基本的なパターンにもとづく一般的な現象に限られていたからである。クーファ学派の学者たちは、形式の類推の規則よりも、多くの形式を不規則なまま分類しようとしたのである。

これら二つの学派は、言語分析のアプローチの仕方がそれぞれ異なっていた。クーファ学派は、言語へのアプローチの方法として、純

粋に「記述論的な」立場をとり、分析的な視点からアラビア語の記述に関与した。これに対して、バスラ学派は、クーファ学派のアプローチを「基礎的」とみなし、そのうえで「因果関係」を考慮したアプローチを要求したのである。このアプローチによって、バスラ学派の学者たちは、さまざまな言語現象の原因を説明し論証しようとしたのである（Al-Halawa:ni: 1979）。

見た目には妥協を全くゆるさないようなこの二つの学派の断絶にもかかわらず、西暦 8 世紀の終わりまでに、この二つの学派は مدرسة بغداد Madrasat Baghda:d（バグダッド学派）の名のもとに統一された。バグダッド学派は、この二つの学派の理論的なさまざまな仮説を基礎とし、それぞれの異なった視点の妥協を目指していた。البغداديدة Al-Baghda:dida「バグダッド学派」と呼ばれたこの派の文法家たちは、アラビア語文法のためにより科学的な基礎を打ち立てるのに成功した。彼らの研究は الخليل ابن أحمد Al-Khali:l Ibn Ahmad（アル＝ハリール・イブン・アフマド）とその弟子スィーバワイヒの哲学や論理の大きな影響をこうむっていた。バスラ学派とクーファ学派の影響は、後世の研究、たとえば西暦 9 世紀、10 世紀の研究にも明らかに見られる。一般的に言って、後のアラビア語の文法学者による業績は、二つの学派の学者たちがすでに主張していたことを精緻にしたり説明したりすることであったのである。

【Ⅳ】 سيبويه Si:bawayh（スィーバワイヒ）と الكتاب Al-Kita:b『アル＝キターブ（書）』

スィーバワイヒというのは、عمر ابن عثمان ابن قنبر ”Amr Ibn ”Uthma:n Ibn Qanbar（アムル・イブン・ウスマーン・イブン・カンバル）のあだ名である。彼はペルシアのシーラーズの近くにある البيدة Al-Bayda（アル＝バイダ）という村で生まれた。青年時代にバスラに出、そこで最初に فقه Fiqf（フィクフ）「イスラム法」と حديث Hadi:th（ハディース）「預言者の言行」を学んだ。彼が文法に興味をもったのは、師の حمّاد ابن دنار Hamma:d Ibn Dina:r（ハンマード・イブン・ディナール）がスィーバワイヒのアラビア語が変だと指摘したことがきっかけで、このときに彼は文法を研究しようと決心した。彼は عيسى ابن عمر ”I:sa Ibn ”umar（イーサー・イブン・ウマル）やيونس ابن حبيب Yu:nis Ibn Habi:b（ユーニス・イブン・ハビーブ）たちのもとで研鑽を積んだが、もっとも学ぶことの多かった師は الخليل ابن أحمد Al-Khali:l Ibn Ahmad（アル＝ハリール・イブン・アハマド）であった。彼は『アル＝キターブ（書）』の中でもっとも多く言及されている文法学者である。スィーバワイヒはアル＝ハリールの文法に関する意見を誠実に記録し、それらの意見を支持するような資料を数多く引用している。

間もなくスィーバワイヒはバスラ学派の指導者となり、アル＝ハリールが亡くなってからは彼の後継者として教えるようになった。スィーバワイヒの弟子には、الأخفش الأوسط سعيد ابن مسعد Al-Akhfash Al-Awsat Sa”i:d Ibn Mis”ida（アル＝アフファシュ・アル＝ア

ウサト・サイード・イブン・ミスイダ）や قترب Qutrub（クトゥルブ）たちがいた。スィーバワイヒが『アル＝キターブ（書）』を書き始めたのはアル＝ハリールの死後であったため、アル＝ハリールの名前のたびに、そのすぐ後ろに رحمه الله RaHima-hu Al-la:h（ラヒマフッラー）「アッラーよ、彼を嘉したまえ」という死者の名の後ろに使われるきまり文句が置かれる。

スィーバワイヒの『アル＝キターブ（書）』は、我々がすぐに手に取れるアラビア語文法書としては、もっとも早くから存在する総合的な文法書であり、すべての伝統はこの書を基礎にしている。この文法書は西暦 8 世紀の中頃に書かれたが、この書ができあがったことにより、イスラーム世界全体におけるアラビア語分析の基礎がうち立てられたのである。

『アル＝キターブ（書）』は、また、西洋世界とアラブ世界の双方にとってずっと研究の対象となってきた。この書の性格や書いてあることばは、スィーバワイヒがこの世を去った後の研究の性格を決定した。つまりそれらというのは、解釈であったり注釈の形をとったものであったのである。また、それらの研究のほとんどは、スィーバワイヒの弟子の الأخفش الأوسط سعيد ابن مسعد Al-Akhfash Al-Awsat Sa”i:d Ibn Mis”ida（アル＝アフファシュ・アル＝アウサト・サイード・イブン・ミスイダ）が著したものであった。スィーバワイヒの没後、『アル＝キターブ（書）』について解釈できるのはこの弟子だけだったのである。ابو إسحاق الزياد Abu: IsHa:q Al-Ziya:di（アブー・イスハーク・アル＝ズィヤーディ）は『アル＝キターブ（書）』について初め

て解釈を試みた。彼が著した شرح كتاب سيبويه Sharh Kita:b Si:bawayh（シャルフ・キターブ・スィーバワイヒ）『シーバワイヒのキターブ「書」の解説』は『アル＝キターブ（書）』の第一次資料として、我々が今現在参照できるほとんど唯一の文献である。

後の研究は、取り扱う範囲としては独自のものを目指してはいるが、本質的にそんなには相違は見られない。それらの研究の中には、文の構造、形態的パターン、類推のパターン、『アル＝キターブ（書）』に引用されている例文等、関連のあるさまざまな様相を扱っているものがある。

『アル＝キターブ（書）』は、アラブ世界のみならず西洋においても同様に、研究のための主題として新たな関心を引き続けている。これらの研究の中には、数は少ないが、スィーバワイヒによる文法の取り扱いと現代の言語学者たちによる文法の取り扱いとが似ているという点を扱ったものがある。

『アル＝キターブ（書）』を読んでまず驚くのは、この書自体の書名がないことである。おそらくスィーバワイヒの死が突然であったために『アル＝キターブ（書）』という名前がついた、というのがもっともらしい説明である。『アル＝キターブ（書）』というのはアラビア語で「書」という意味であるが、この書名は الأخفش الأوسط Al-Akhfash Al-Awsat（アル＝アフファシュ・アル＝アウサト）がスィーバワイヒの著作につけた名前である。彼はスィーバワイヒが亡くなった後、自身がスィーバワイヒの著作を教えたり解説したりするために、この師の業績を取っておいたのである。けれども、バスラ学派にとって『アル＝キターブ（書）』が重要であったために、『アル＝キターブ（書）』といえばスィーバワイヒの「書」をさすことになったのである。

そして、原資料に言及するときにقرأ فران الكتاب qara'a fula:nun Al-Kita:b（カラア・フラーヌン・アル＝キターブ：「書」にそう書いてある）と付け加えると、この「書」がスィーバワイヒの『アル＝キターブ（書）』をさすことはだれにも明らかであるようになったのである。

現代の書籍とは異なり、『アル＝キターブ（書）』には序論もなければ結論もない。スィーバワイヒはまずكلام Kala:m（話）の要素の単位をإسم Ism（イスム：名詞類）、فعل Fi"l（フィウル：動詞類）、حرف Harf（ハルフ：不変化詞類）に分類し、نحو NaHw（ナフウ：統辞論）から説き始め音韻論で終えている。この構成のために、たとえば Jahn(1985) のような学者が、アラビア語文法学者は音韻論が最後に来ると指摘することになった。ヨーロッパの文法学者は、反対に、音韻論がおそらくもっとも難解であるからとして、音韻論から議論を始めるのが常であったのである。

『アル＝キターブ（書）』の構成は、スィーバワイヒが第一に興味をもっていたのが統辞論であったということの反映ではなかったかと思わせる（Abu: Mansour & Abu: Mansour(1984)）。アル＝ハリールが統辞論よりも音韻論にもとづいた文法論議を好んだのとは異なり、スィーバワイヒは、音韻論を扱うのは統辞論について詳しく論じた後のことであるとし、統辞論の諸相を解説してから他の文法レベルに言及したのである。この事実は、我々がくだす『アル＝キターブ（書）』の評価になんら影響を与えるものではない。扱っている範囲が広いこと、扱いの方法、また資料が精密であること等が、『アル＝キターブ（書）』をしてもっとも価値あるアラビア語の文法書たらしめているのである（この詳細に関しては Abu: Mansour & Abu: Mansour(1984) を参照されたい）。

訳者あとがき

本稿はAnas Hasan Abu: Mansourが1986年にフロリダ大学に提出した博士論文、『A Functional Analysis of Sentence Structure in Standard ARABIC : A Three-level Approach.』の第二章「Traditional Arab Grammarians（伝統的アラビア語学者たち）」の部分（このタイトルの章はpp.51-92であるが、そのうちの前半p.62まで）を訳したものである。

アラビア語の文法学者について日本語で読める紹介は、クリステヴァ『ことば、この未知なるもの』（国文社）の部分等いくつかの例外を除けばあまりにも少ない。そこにこの論文の紹介の意味もあろうと考えられるのだが、アブー・マンスールの論文は、一読して明らかなように、あまりにも概観にすぎるとの批判もあるかもしれない。

翻訳は、できる限り原文に忠実にと心掛けたが、一部かえって本文よりも詳しく解説的に訳した部分もある。たとえば「Kala:m（話）」を「Ism（名詞類）」、「Fi"l（動詞類）」、「Harf（不変化詞類）」という部分の原文は、「speech」を「nouns」、「verbs」、「particles」に分類するという表現がしてあったのだが、Si:bawayh（スィーバワイヒ）のAl-Kita:b『アル＝キターブ（書）』の原文にあわせて伝統的アラビア語文法の術語を使用した。また原文では人名のいくつかの表記に統一が見られないものがあったが、気がついた範囲で修正しておいた。

また、アラビア語の定冠詞「Al-」は、そのあとに続く名詞の最初の音によって、そのまま「Al-（アル）」と発音されたり、同化して二重子音になったりする。本稿では、「アッドゥアリ」と「ラヒマフッラー」は二重子音になった発音を採用し、他は「Al-（アル＝）」と表記した。

文中に出てきた『アインの書』等については【付録】の文献表を参照されたい。

（1988 年 8 月 1 日初稿、2015 年 5 月 7 日改稿）

文　献

Abu: Mansour, Anas & Abu: Mansour, M(1984)『Si:bawayh's Al-Kita:b : A lost capter in the history of linguistics.』Unpublished paper. Gainesville, FL : University of Florida

Ami:n, Ahmad(1956)『Duha: Al-Isla:m.（イスラームの黎明）』3vols, Cairo

Al-Halawa:ni, Muhammad Kheur(1979)『Al-Mufassal fi: Ta:ri:kh Al-NaHw Al-"arabi:.（アラビア語文法史詳解）』Beirut. Mu'assat Al-Risa:la

Brockelmann, Carl(1960)『Arabische Grammatik.』Paradigmen, Literatur, Ubungsstucke und Glossar. 14. Aufl. besorgt von Manfred Fleishhammer. Leipzig : Harrassowitz

Dayf, Shawqi(1968)『Al-Mada:ris Al-NaHwiyya.（文法学者たちの諸学派）』Cairo : Dar Al-Ma"a:rif

Fleisch, Henri(1966)『Al-"arabiyya Al-FusHa:（正則アラビア語）: NaHwa bina:'in Lughawiyyin Jaddi:din. Classical Arabic : Towards a modern structure.』translated by Abdal Sabu:r. Sha: hi:n. Beurut : N.P.

Jahn, G. (1895)『Si:bawayh's　Buech ueber die Grammatik Uebersetzt und erklaer von Dr. G. Jahn.』Berlin : N.P.

文献【付録】

アラビア語に関して日本語で書かれた文法書や入門書は、江村 (2015)「アラビア語学習者のために」にあげておいたので、参照されたい。

ここではやや専門的と思われる文献をリストアップしたが、もとより網羅的なものではなく、たまたま筆者の手元にあるものを心覚えのためにリストにしたものであり、いわば筆者自身のための文献表であることをお断りしておきたい。

網羅的な文献表については、筆者がお世話になった文献表があるので以下にあげる。少々古くなったが、今でも有効であろうと思う。

Bakalla, M. H. (1975)『Bibliography of Arabic Linguistics』Mansell, London

また、江村 (2014)「アフロアジアについて」で引用した

Frajzyngier, Zygmunt & Erin Shay (Edited)(2012)『The Afroasiatic Languages』Cambridge University Press

の巻末（pp.628-675）にある Bibliography も、最新の情報を伝えてくれているので、これらを参考にされたい。

文献

〈邦語文献〉

飯森嘉助 (1975)「古典文法と方言との比較による Ka:na とその類似動詞にみられる用法上の変遷」『スカラベ』第 6 号、拓殖大学アラビア語研究会、pp.1-7

飯森嘉助 (1972)「ハムザの正書法」『語学研究』№. 1、pp.1-28

飯森嘉助 (1973)「アラビア語基礎単語 1」『語学研究』№. 2、pp.93-131

飯森嘉助 (1974a)「アラビア語基礎単語 2」『語学研究』№. 3、pp.106-151

飯森嘉助 (1974b)「アラビア語基礎単語 3」『語学研究』№. 4、pp.85-124

飯森嘉助 (1974c)「アラビア語基礎単語 4」『語学研究』№. 5、pp.88-108

飯森嘉助 (1975)「アラビア語基礎単語 5」『語学研究』№. 6、pp.129-156

飯森嘉助 (1975)「アラビア語基礎単語 6」『語学研究』№. 7、pp.113-125

飯森嘉助 (1976a)「アラビア語基礎単語 7」『語学研究』№. 8、pp.101-116

飯森嘉助 (1976b)「アラビア語基礎単語 8」『語学研究』№. 9、pp.136-155

飯森嘉助 (1977a)「アラビア語基礎単語 9」『語学研究』№. 10、pp.167-188

飯森嘉助 (1977b)「アラビア語基礎単語 10」『語学研究』№. 11、pp.120-140

飯森嘉助 (1978a)「アラビア語における双数形：文語編」『語学研究』№. 14、pp.45-58, 117

飯森嘉助 (1978b)「アラビア語における双数形：口語編」『語学研究』№. 15、pp.1-3, 231

井筒俊彦 (1955)「アラビア語」『世界言語概説』下巻、研究社、pp.1155-1221

池田修 (1968)「'ABU L-'ASWAD D-DU'ALI をめぐって」19、『大阪外国語大学学報』、pp.61-69

池田修 (1969)「10 世紀以降のアラビア語研究の歴史」、『大阪外国語大学学報』22、pp.35-49

池田修 (1970)「9 世紀以前のアラビア語の研究」、『オリエント』Vol. ＸⅠ、Nos. 3,4、日本オリエント学会、pp.121-160

池田修 (1973a)「アラブ文法学における "A:mil 論」『大阪外国語大学学報』29、pp.25-33

池田修 (1973b)「アインの書について」、『オリエント』Vol. ＸＶⅠ、№. 1、日本オリエント学会、pp.75-95

池田修 (1985)「エジプトにおけるアラビア語の歴史」、『イスラム世界』23・24、日本イスラム協会、pp.1-15

井村行子 (1993)「ドイツ・オリエンタリズムの研究に寄せて－ヨーロッパのアラブ・イスラム研究」、『駒沢史学』第 45 号、駒沢史学会、駒澤大学歴史学研究室内、pp.129-142

江村裕文 (2014)「「アフロアジア」について」『異文化 [本編]』15、法政大学国際文化学部、pp.33-38

江村裕文 (2015)「アラビア語学習者のために」『異文化 [論文編]』16、法政大学国際文化学部、pp.37-56

竹田新 (1975)「アラビア語文献に見られるスィーラー」『アラブ語研究』Ⅰ、東京・大阪外国語大学アラビア語研究室、pp.1-8

田中四郎 (1958)「アラビア語における「神」の堕落」『日本オリエント学会月報』pp.1-7

内記良一 (1963)「アラブ語における対義性について」『東京外国語大学論集』№ 11、東京外国語大学、pp.125-142

内記良一 (1965)「アラブ語明義論の展開」『東京外国語大学論集』№ 12、東京外国語大学、pp.75-89

内記良一 (1966)「東方アラブ諸国に於ける言語問題」『東方研究』№ 14、〈イスラム特集〉大東文化大学東洋京研究所、pp.9-11

中野暁雄 (1973)「ハム・セム諸語調査から帰って」『通信』№ 20、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、pp.17-28

中野暁雄 (1974a)「Texts of Falktales in Berker (1)（Dialect of Anti-Atlas）」『アジア・アフリカ言語文化研究』№ 7、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、pp.138-224

中野暁雄 (1974b)「Texts of Falktales in Berker (2)（Dialect of Ait-Warain）」『アジア・アフリカ言語文化研究』№ 8、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、pp.161-205

堀内勝 (1971)「QIRA:'AH（コーランの読誦）に関するノート」『アジア・アフリカ言語文化研究』№ 4、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、pp.191-231

牧野信也 (1963)「アラビア語動詞意味構造に関する一試論」『Area and Culture Studies』№ 10、東京外国語大学、pp.97-109

松田伊作 (1981)「セム・ハム諸語」北村甫編『講座言語第 6 巻世界の言語』大修館書店、pp.49-77

矢島文夫 (1961a)「アラビア文語における強意文形式　－その語源的および言語構造論的解釈」『言語研究』№ 40、pp.89-90

矢島文夫 (1961b)「アラビア語の学習における基礎語彙について」『東洋研究』№. 1、大東文化大学東洋研究所、pp.43-47
矢島文夫 (1980)「ヨーロッパにおけるアラビア語学の伝統　－ライトの文法とレーンの辞典の形成をめぐって」『法學研究』第 54 巻第 3 号、慶應義塾大学法学部、pp.255-266
矢島文夫編 (1985)『アフロアジアの民族と文化』山川出版社
山路きみ子 (1952a)「アラビア語語根辞典」『言語集録』№. 1
山路きみ子 (1952b)「アラビア語の triliteralism と biliteralism」『言語集録』№. 1
山路きみ子 (1952c)「コーランの Pamanigation について」『言語集録』№. 2
山路きみ子 (1952d)「コーランの Punctuation について」『言語集録』№. 3
山路きみ子 (1953)「コーランに於ける秘句の研究」『言語集録』№. 4、pp.65-77
吉町義雄 (1952)「イブン・マーリクの千一行詩亞語文法」『文学研究』43、九州大学文学部、pp.82-107
吉町義雄 (1953)「イブン・マーリクの千一行詩亞語文法（二）」『文学研究』47、九州大学文学部、pp.57-79
吉町義雄 (1954)「イブン・マーリクの千一行詩亞語文法（三）」『文学研究』50、九州大学文学部、pp.97-115
吉町義雄 (1956)「イブン・マーリクの千一行詩亞語文法（四）」『文学研究』54、九州大学文学部、pp.57-74
吉町義雄 (1957)「イブン・マーリクの千一行詩亞語文法（五）」『文学研究』56、九州大学文学部、pp.83-100
吉町義雄 (1960)「イブン・マーリクの千一行詩亞語文法（六）」『文学研究』59、九州大学文学部、pp.81-98
吉町義雄 (1963)「イブン・マーリクの千一行詩亞語文法（七）」『文学研究』62、九州大学文学部、pp.111-125
吉町義雄 (1966)「イブン・マーリクの千一行詩亞語文法（完）」『文学研究』63、九州大学文学部、pp.85-137

〈翻訳文献〉

Cohen, David ／矢島文夫訳 (1972)「ハム・セム語族」Andre Martinet 編、泉井久之助監修『〈近代言語学体系第 2 巻〉世界の言語』紀伊國屋書店、pp.145-189
Fuek, Johan ／井村行子訳 (2002)『アラブ・イスラム研究史』法政大学出版会（原著 は『Die arabischen Studien in Europa bis in den Anfang des 20. Jahrhundert』Otto Harrassowitz, Leipzig, 1955）

〈欧米語文献〉

Abboud, Peter(1970)「Spoken Arabic」『Current Trends in Linguistics』Vol.6 : Linguistics in South West Asia and North Africa、Mouton, The Hague、pp.439-466

Abdel-Malek, Zaki N. (1972)『The Closed-List Classes of Colloquial Egyptian Arabic』『Janua Linguarum』Series Practica, 128, Mouton, The Hague, Paris

Abu-Haidar, Farida(1979)『A Study of the Spoken Arabic of Baskinta』E. J. Brill, Leiden & London

Aboul-Fetouh, Hilmi, M. & M. (1969)『A Morphological Study of Egyptian Colloquial Arabic』Mouton, The Hage, Paris

Al-Ani, Salman H. (1970)『Arabic Phonology : An Acoustical and Physiological Investigation』『Janua Linguarum』Mouton, The Hague, Paris

Al-Khuli, Muhammad(1979)『A Contrastive Transformational Grammar : Arabic and English』E. J. Brill, Leiden

Altoma, Sahih J. (1969)『The Problem of Diglossia in Arabic : A Comparative Study of Classical and Iraqi Arabic』Harverd Middle Eastern Monograph Series, Harverd University Press, Cambridge, Massachusetts

Anwar, Mohamed Samil(1979)『BE and Equational Sentences in Egyptian Colloquial Aabic』Amsterdam, John Benjamins B.V.

Azer, Hany Amin(1985)「The Expression of Negation in Egyptian Colloquial Arabic (ECA)」『Studies in African Linguistics』Supplement 9、pp.15-18

Beeston, A. F. L. (1978)「Some Points of Arabic Syntax」『J. S. S.』ＸＸⅢ、№1、pp.56-63

Beg, Muhammad Abdul-Jabbar(1979)『Arabic Loan-Words in Malay : A Comparative Study』Kuala Lumpur

Belnap, R. Kirk & Niloofar Haeri(1997)『Structuralist Studies in Arabic Linguistics : Charles A. Ferguson's Papers, 1954-1994』Brill, Leiden, New York, Köln

Bernards, Monique(1997)『Changing Traditions Al-Mubarrad's Refutation of Si:bawayh & the Subsequent Reception of the Kita:b』E. J. Brill, Leiden, New York, Köln

Blanc, Haim(1971)「Arabic」『Current Trends in Linguistics』Vol.7 : Linguistics in Sub-Saharan Africa、Mouton, The Hage、pp.501-509

Blau, Joshua(1969)『L'Apparition du Type Linguistique Neo-Arabe』『Revue des Etudes Islamique』Librairie Orientaliste Paul Geuthner, Paris

Bohas, Georges, Jean-Patrick Guillaume, Djamel Kouloughli(1990)『The Arabic Linguistic

Traditionition』 Georgetown University Press, Washington, D. C.
Borer, Hagit & Laurice Tuller(1985)「Nominative/Agreement Complementarity and VSO Order in Standerd Arabic」『Studies in African Linguistics』 Supplement 9、pp.27-32
Brady, David(1978)「The Book of Revelation and The Qur'an : Is There a Possible Literary Relationship?」『J. S. S.』 XXⅢ、№.2、pp.216-225
Bravmann, M. M. (1968)『The Arabic Elative : A New Approach』 E. J. Brill, Leiden
Brill, Moshe & D. Neustadt, P. Schusser(1940)『The Basic Word List of the Arabic Daily Newspaper』 The Hebrew University Press Association, Jerusalem
Brockelmann, Carl(1979)『Arabische Grammatik』 VEB Verlag Enzyklopaedie Leipzig
Bruennow, R. (1895)『Chrestomathy of Arabic Prose-Pieces』 Porta Linguarum Orientalum, Reuther & Reichard, Berlin
Bruennow / Fischer(1966)『Arabische Chrestomathie aus Prosaschriftsteller』 VEB Verlag Enzyklopaedie Leipzig
Bruennow, R. (1895)『Chrestomathy of Arabic Prose-Pieces』 Porta Linguarum Orientalum, Reuther & Reichard, Berlin
Burckhardt, John Lewis(1972)『Arabic Proverbs』 Curzon Press, London
Cadora, F. J. (1979)『Interdialectal Lexical Comparatibility in Arabic』 E. J. Brill, Leiden
Cadora, F. J. (1992)『Bedouin, Village and Urban Arabic』 E. J. Brill, Leiden, New York, Köln
Cantarino, Vicente(1974)『Syntax of Modern Arabic Prose Ⅰ : The Simple Sentence』 Indiana University Press, Bloomington, London
Cantarino, Vicente(1975)『Syntax of Modern Arabic Prose Ⅱ : The Expanded Sentence』 Indiana University Press, Bloomington, London
Cantarino, Vicente(1975)『Syntax of Modern Arabic Prose Ⅲ : The Compound Sentence』 Indiana University Press, Bloomington, London
Cantineau, Jean / Youssff Helbaoui(1953)『Manual Elementaire D'Arabe Oriental』 Librairie C. Klincksieck, Paris
Cantineau, Jean(1960)『Cours de Phonetique Arabe』 Librairie C. Klincksieck, Paris
Carter, M. G. (1969)『Les Origines de la Grammaire Arabe』『Extrait de la Revue des Etudes Islamique』 X L/1, Librairie Orientaliste Paul Geuthner, Paris
Cohen, David(1964)『Le Parler Arabe des Juifs de Tunis』 Mouton & Co, Paris
Cohen, David(1970)『Etudes de Linguistique Semitique et Arabe』 Mouton, The Hage, Paris
Cohen, David(1975)『La Parler Arabe des Juifs de Tunis』 Mouton, The Hage, Paris

Cowell, Mark W. (1964)『A Reference Grammar of Syrian Arabic』Georgetown University Press, Washington D. C.

Diakonoff, I. M. (1965)『Semito-Hamitic Languages : An Essay in Classification』《NAUKA》Publishing House, Moscow

Dozy, R. (1981)『Supplement aux Dictionnaires Ababes』(Reproduction de l'Edition Originale de 1881)、E. J. Brill, Leyde

El-Ezabi, Yahia A. (1967)「The Sectors of Written Arabic」『Monograph Series on Language』Georgetown University, Washington D. C. 、pp.176-180

El-Noory, Atteya Yussif(1985)「Egyptian Arabic and English : Nativization Process」『Studies in African Linguistics』Supplement 9、pp.100-104

Erwin, Wallace M. (1963)『A Basic Course in Iraqi Arabic』Georgetown University Press, Washington D. C.

Erwin, Wallace M. (1969)『A Short Reference Grammar of Iraqi Arabic』Georgetown University Press, Washington D. C.

Ess, John van(1917, 1938)『The Spoken Arabic of Iraq』Oxford University Press

Ferrand, M. Gabriel(1903)「L'Element Arabe et Souahili en Malgache Ancien et Moderne」『Journal Asiatique』Didieme Serie, t, Ⅱ , №. 3, pp.451-485

Fischer, Wolfdietrich(1972)『Grammatik des Klassischen Arabisch』Otto Harrassowitz, Wiesbaden

Fischer, Wolfdietrich & Otto Jastraw(1980)『Handbuch der Arabischen Dialekte』Otto Harrassowitz, Wiesbaden

Fiteih, Muhammad Solima Ibrahim(1983)『Preposition and Prepositional Verbs in Classical Arabic』Volume 1 and 2, Department of Linguistics and Phonetics, The University of Leeds

Frajzyngier, Zygmunt(1979)「Notes on The $R_1R_2R_2$ Stems in Semitic」『Journal of Semitic Studies』Vol.24、№. 1、pp.1-12

Fukuhara, Nobuyoshi(1975)「Aramaic Loan-Words in Arabic」『アラブ語学研究』Ⅰ、東京・大阪外国語大学アラビア語研究室、pp.9-23

Guillaume, Alfred(1965)『Hebrew and Arabic Lexicography : A Comparative Study』E. J. Brill, Leiden

Halila, Hafedh(1985)「Some Syllable Structure Based Rules of Tunisian Arabic」『Studies in African Linguistics』Supplement 9、pp.135-140

Harrel, Richard S. (1965)『A Basic Course in Moroccan Arabic』Georgetown University Press, Washington. D. C.

Harrel, Richard S. (Edited)(1966)『A Dictionary of Moroccan Arabic : Moroccan-English』Georgetown University Press, Washington. D. C.

Hashim, Abul(1969)『Arabic Made Easy』Khurshid Enterprise, Pakistan

Haywood, J. A. (1964)『Key to a New Arabic Grammar of the Written Language』Lund Humphries London

Holes, Clive(1990)『Gulf Arabic』Croom Helm Descriptive Grammars Series, Routledge, London and New York

Hopkins, Simon(1984)『Studies in the Grammar of Early Arabic』Oxford University Press, Great Britain

Hospers, J. H. (1978)『Generl Linguistics and the Teaching of Dead Hamito-Semitic Languages』E. J. Brill, Leiden

Hudson, Grover(1985)「The Arabic Doubled Verb Conspiracy and Morpheme Invariance」『Studies in African Linguistics』Supplement 9、pp.141-145

Jeffery, Arthur(1938)『The Foreign Vocabulary of the QUR'A:N』Oriental Institute, Baroda

Kam, Aboul-Ghany Muhhammad(1981)『Government Binding in Classical Arabic』Ph. D. Dissertation, U-M-I Servises

Kaestner, Hartmutm,(1981)『Phonetik und Phonologie des Modernen Hocharabisch』VEB Verlag Enzyklopaedie Leipzig

Karl-Marx-Universität Leipzig(1970)『Deutsch Ein Lehrbuch fuer Auslaender Teil 1 Glossar Deutsch-Arabisch』VEB Verlag Enzyklopaedie, Leipzig

Kenstowicz, Michael(1985)「On Core Syllables on Modern Arabic Dialects」『Studies in African Linguistics』Supplement 9、pp.168-172

Killean, Mary Carolyn Garver(1970)「Classical Arabic」『Current Trends in Linguistics』Vol.6 : Linguistics in South West Asia and North Africa、Mouton, The Hague、pp.413-438

Lahaie, Karen(1985)「The ma- Prefix in Afroasiatic」『Studies in African Linguistics』Supplement 9、pp.186-190

Landou,jakob M.(1959)『A Word Count of Modern Arabic Prose』American Council of Learned Societies, in cooperation with the School of Education, Hebrew University, Jerusalem

Leemhuis, F. (1977)『The D and H Stems in Koranic Arabic』E. J. Brill, Leiden

Levin, Aryeh(1979)「The Si:bawayhi's View of the Structure of KA:NA WA 'AXAWA:TU:HA:」『Jerusalem Studies in Arabic and Islam』The Magnes Press, The Hebrew University, Jerusalem、pp.185-285

Levtzion, Nehemia(1979)「The Twelfth-Century Anonymous KITAB AL-ISTIBSA:R : A History of a Text」『J. S. S.』ＸＸⅣ、№2、pp.201--217

Makino, Shinya(1960)「Über die Verneinung MA: im Zum Arabischen」『言語研究』№38、pp136-147

Makino, Shinya(1963)『Zum Semantischen Aufbau der Neuarabischen Verben』慶応義塾大学言語文化研究所モノグラフィー

Mammeri, H. (1979)『Epreuves D'Arabe Litteral et Maghrebin』Librairie D'Amerique et D'Orient, Adrien Maisonneuve, Paris

Marcais. Ph. (1977)『Esquisse Grammaticale de L'Arabe Maghrebin』Librairie D'Amerique et D'Orient, Adrien Maisonneuve, Paris

Masoud, Al-Qahtani Duleim(1988)『Semantic Valence of Arabic Verbs』Ph. D. Dissertation, U-M-I Servises

Mifsud, Manwel(1995)『Loan Verbs in Maltese : A Descriptive and Comparative Study』E. J. Brill, Leiden, New York, Koeln

Ministry of Culture, United Arab Republic(1966)『Ta"allum Al-"Arabiyyat : Learn Arabic Ⅰ・Ⅱ』Cairo

Mitchell, T. F. (1956, 1960, 1978)『An Introduction to Egyptian Colloquial Arabic』Clarendon Press, Oxford

Mitchell, T. F. (1962)『Colloquial Arabic : The Living Language of Egypt』The Teach Yourself Books, The English Universities Press LTD, London

Mohammad, M. A. (1985)「Stylistic Rules in Classical Arabic and The Levels of Grammar」『Studies in African Linguistics』Supplement 9、pp.228-232

Nakano, Akio(1976)『Dialogues in Moroccan ShilhaTexts of (Dialect of Anti-Atlas and Ait-Warain)』African Languages and Ethnography.4、Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa、pp.161-205

Nöldeke, Theodor(1963)『Zur Grammatik des Classischen Arabisch』Wissenschaftliche Buchgesellschaft, Darmstadt

Norlin, Kjell(1985)「Acoustic Analysis of Vowels and Diphthongs」『Studies in African Linguistics』Supplement 9、pp.238-244

O'Leary, De Lacy(1958)『Colloquial Arabic』Routledge & Kegan Paul LTD. London

Paret, Harder(1962)『Kleine Arabische Sprachlehler』Julius Groos Verlag Heidelberg

Paret, Rudi(1968)『The Study of Arabic and Islam at German Universities』Fanz Steiner Verlag GMBH. Wiesbaden

Piamenta, Moshe(1979)『Islam in Everyday Arabic Speech』』E. J. Brill, Leiden

Piamenta, Moshe(1979)「Jerusalem Arabic Lexicon」『Arabica』Tome ＸＸⅥ、pp.229-266

Rabin, C. (1962)『Arabic』Lund Humphries Modern Language Readers, Lund Humphries London

Reckendorf, H. (1967)『Die Syntaktischen Verhältnisse des Arabischen』E. J. Brill, Leiden

Reckendorf, H. (1977)『Arabische Syntax』Carl Winter Universitätverlag, Heidelberg

Rescher, Nicholas(1967)『Temporal Modalities in Arabic Logic』Foundations of Language : Supplementary Series, D. Reidel Publishing Company, Holland

Retsoe, Jan(1989)『Diathesis in the Semitic Languages : A Comparative Morphological Study』E. J. Brill, Leiden, New York, Kobenhavn, Köln

Scheindlin, Raymond(1978)『201 Arabic Verbs : Fully Conjugated in all the Forms』Barron's Educational Series, INC. Woodbury, New York

Scott, G. C. (1962)『Practical Arabic』Longmans, London

Sezgin, Fuat(1982)『Geschichte des Arbischen Schrifttums Ⅷ』E. J. Brill, Leiden

Sezgin, Fuat(1984)『Geschichte des Arbischen Schrifttums Ⅸ』E. J. Brill, Leiden

Sheikh, F. L. (1980)『Modern Arabic Reader』Asian Publishers, New Delhi

Shir, Al-Sayyid 'Addi(1980)『A Dictionary of Persian Loan-Words in the Arabic Language』Librairie du Liban, Lebanon

Stuart, Don Graham(1967)『Linguistic Studies in Memory of Richard Slade Harrell』Georgetown University Press, Washington D. C.

Talmon, Rafael(1997)『Arabic Grammar in its formative Age : Kita:b al-"Ayn & its Attribution to Hali:l b. Ahmad』Brill, Leiden, New York, Koeln

Talmoudi, Fathi(1980)『The Arabic Dialect of Su:sa (Tunis)』Acta Universitatis Gothoburgensis, Sweden

The Middle East Centre for Arab Studies(1962)『A Reading Book in Modern Arabic』Khayats, Beirut

The Middle East Centre for Arab Studies(1969)『A Selected Word List of Modern Literary Arabic』Khayats, Beirut

Versteegh, C. H.M. (1993)『Arabic Grammar and Qur'a:nic Exegesis in Early Islam』E. J. Brill, Leiden, New York, Köln

Wagoner, Merrill Y. Van / Arnorld Satterthwait / Frank Rice(1977)『Spoken Ababic (Saudi)』Spoken Language Services, Inc.

Wahba, Wafaa(1985)「Some Aspects of LF Movement in Iraqi Arabic」『Studies in African Linguistics』Supplement 9、pp.309-314

Watson, Janet C. E. (1996)『Lexcon of Arabic Horse Terminology』Kegan Paul International, London, New York

Weil, Gotthold(1913)『Die Grammatischen Schulen von Kufa und Basra』E. J. Brill, Leiden

Woodard, Roger D. (Edited)(2008)『The Ancient Languages of Syria-Palestine and Arabia』Cambridge University Press, Cambridge

Woodhead, D. R. & Wayne Beene(Edited)(1967)『A Dictionary of Iraqi Arabic : Arabic-English』Georgetown University Press, Washington D. C.

Yellin, A. & L. Billig(1948)『An Arabic Reader with Notes and a Glossary (Mukhta:ra:t Al-Qira:'at fi: Al-Lughat Al-"Arabiyyat)』Goverment of Palestine, Department of Education, Jerusalem

Yokwe, Eluzai M. (1985)「The Diversity of Juba Arabic」『Studies in African Linguistics』Supplement 9、pp.323-328

Zagorski, Bogslaw R. (1974)「La Toponymie du Nord-Ouest de L'Afrique a L'Epoque Precoloniale」『Africana Bulletin』Nr.20、Warzawa、pp.109-119

Ziadeh, Farhat J. & R. Bayly Winder(1957)『An Introduction to Modern Arabic』Princeton University Press

〈ロシア語文献〉

Lebedev, B. B. (1977)『Pazdnii Srednearabskii Izik (XⅢ－XⅧ bb)（中世アラビア語研究）』Izdatelistba、《NAUKA》、Moskba

Mishkurov, Z. N. (1982)『Aljilskii Dailect Arabiskava Izika（アラビア語アルジェリア方言研究）』《NAUKA》、Moskba

'U:f, "Ali: ASghar Muhamad(1971)『Al-Lughat Al-"Arabiyyat（アラビア語）』Da:r Al-Nashir《Ma"a:rif》, Baku:

Zavadovskii, J. N. (1981)『Mabritanskii Dialect Arabskava (Hassaniya)（アラビア語マグリブ方言研究）』《NAUKA》、Moskba

〈アラビア語文献〉

مازين ألمبارك (1979) ألمؤوجز تاريخ البلاغة ,
دار الفكر, دمشق

Al-Muba:rak, Ma:zin(1979)『Al-Mau:jaz Ta:ri:kh Al-Bala:ghat（バラーガの歴史概観）』

Da:r Al-Fakr, Dimashq

محمود أمين ألنّواوي (1961) شره إبن عقيل, على ألفيّة إبن مالك , مكتبة ومتبعة محمّد علي صبيه و أولاذ , الأزهل, مصر

Al-Nawa:wiy, Mahmu:d 'Ami:n(1961)『Sharh Ibn "Aqi:l（イブン・アキールの解釈）:" Ala: 'Al-Fi:yat Ibn Ma:lik（イブン・マーリクの千一行詩について）』: Maktabat wa Matbi"at Muhammad "Ali: Sabi:h wa 'Awla:dh, Al-'Azhal, Misr

عبد الحمد ألشّلقاني (1977) ألأعراب الرووا‌ة, دار المعارف بمصر

Al-Shalqa:ni:, "Abd Al-Hamid, (1977)『Al-'A"ra:b Al-Ru:wa:t（噛み砕いたアラビア語）』Da:r Al-Ma"a:rif bi-MiSr

يعقو بكر (1979) فقه اللّغة العربيّة, مكتبة, لبنان, بيروت

Bakr, Ya"qu:b(1979)『Fiqh Al-Lughat Al-"Arabiyyat（アラビア語言語学）』Maktabat, Lubna:n, Bayru:t

ظباعي (1975) قاموس الأفعال العربيّة, مكتبة, لبنان, بيروت

Dhaba:"i:(1975)『Qa:mu:s Al-'Af"a:l Al-"Arabiyyat（アラビア語動詞辞典）』Maktabat, Lubna:n, Bayru:t

محمّد كامل حسين (1976) اللّغة العربيّة المعاصرة, دار المعارف بمصر

Husain, Muhammad Ka:mil(1976)『Al-Lughat Al-"Arabiyyat Al-Ma"a:Sirat（口述者のアラブ）』Da:r Al-M"a:rif bi-MiSr

عمر رظا كهّالة (1971) اللّغة العربيّة وعلومها, مكتبة

النّسر برثق, دار المعلّم العربيّ
Kahha:lat, ”Amur Radha: (1971)『Al-Lughat Al-”Arabiyyat wa ”Ulu:mu-ha:（アラビア語とその知識）』Maktabat, Al-nasar bi-rathaq, Da:r AL-Mu”allim Al-”Arabiyy

Sayed, Yassa Abdel & Samiha Y. A. Sayed(1976)『Al-Mura:sila:t Al-Tuja:riyyat : ”Arabiyy-Inki:li:ziyy-Faransiyy（ビジネス・レターの書き方：アラビア語—英語—フランス語』Maktab Nashir Al-Thaqa:fat Al-uja:riyya, Twrntw, Kanadat(トロント、カナダ）

سيبويه (أبي بشر عمرو الملقب) (1316 ه) كتاب 1,2
Sibawayh['Abi: Bishr ”Amru: Al-Mulqab](1316 A.H.)『Kita:b Ⅰ・Ⅱ』Bulaq Press、[Reprinted Maktabat Al-Muthanna:、Baghdad (1968)]

علي عبد الوحيد وافي (1971) فقه اللّغة, دار نهضة مصر للتبئ والنشر, القاهرة
Wa:fi:y, ”Ali: ”Abd Al-Wa:Hid(1971)『Fiqf Al-Lught（言語学）』Da:r Nahdhat Misr Li-l-tab'i wa Al-Nashr, Al-Qa:hirat